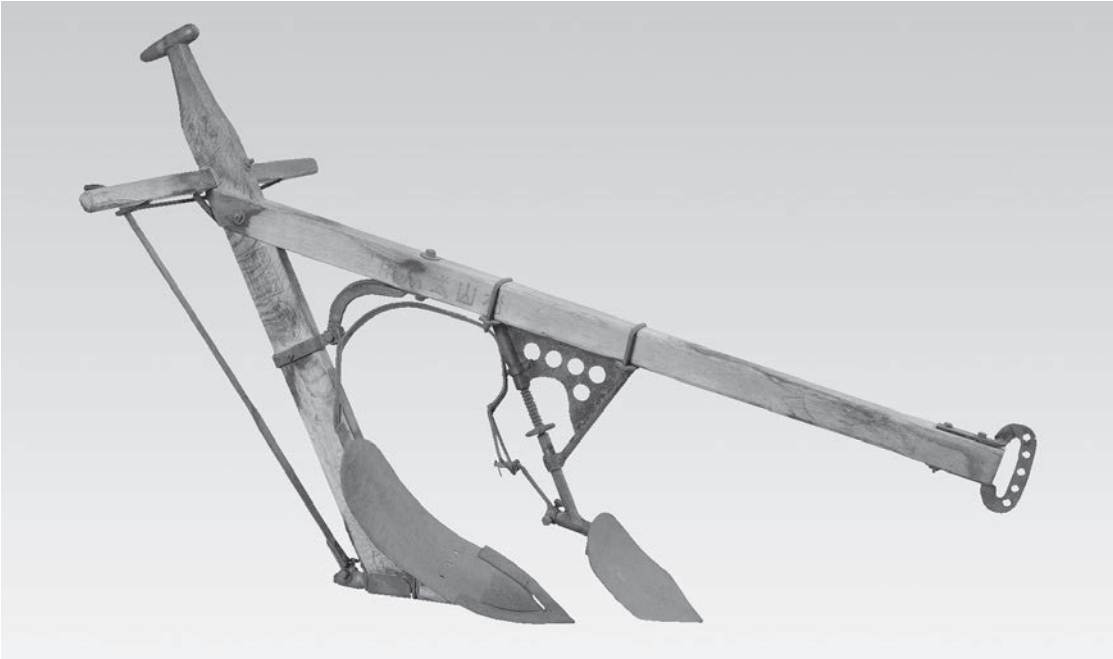
館　報

まつやま

第18号

題字　松山篤書

平成21年9月24日発行



松山式双用二段耕犂

1．松山式双用二段耕犂……表紙

2．長野県上伊那農業高等学校より寄贈された犂資料の考察…２～５

3．二段耕犂……６・７

4．報告事項……８

財団法人 松山記念館

長野県上伊那農業高等学校より寄贈された犂資料の考察

平成二〇年の八月に長野県上伊那農業高等学校より二二点の農業機械・機具類が寄贈されました。修学内容の変更等により保管していた農機具資料を廃棄処分することになったことから、（財）松山記念館へ移管となったものです。寄贈していただいた資料は、人力犂、畜力犂一〇点、耕うん機用双用犂四点、砕土機、田植機（カンリウ製）、荷車（明治時代の搬送用）、稲刈結束機（エンジン搭載型・エンジン不搭載型）、スクリュウ式ロータリ（古川製）のロータリ部、松山ニッポンプラウ（MTR一五一）で、人力・畜力・動力犂はもとより、いずれも農業機械開発史において重要な役割をはたしてきた農機具です。

本稿では寄贈された資料のうち、人力犂・畜力犂について紹介し、伊那地方での畜力耕普及についても考察を試みたいと思います。このうち、人力犂は長野県吉田高等学校（旧　上水内農学校）から譲り受けたもの、畜力犂のうち双用一段耕犂の上田犂一点・礒野式一点・ダイヤ犂と双用二段耕犂の東洋社製日の本号は、昭和五二～五三年に上伊那農業高等学校同窓生から資料として寄贈されたものということです。

本稿では、犂の部位・作用を説明するにあたって、犂を操縦して進行する時に土塊が操縦者の左側に反転することを左反転、右側に反転することを右反転と記載。また、犂の焼き印部位についても操縦者にとって右の側面を右側面と記載しています。

【人力犂】

①源五兵衛犂

「両開手引鍬」と犂轅に墨書されていて「府中　駅前三好製」「上水内農学校」の焼き印が犂柱にあります。上水内農学校（現　長野県吉田高等学校）は、明治四一年四月に上水内郡組合立東部農学校（乙種）として設立され、大正一二年三月から甲種に昇格し上水内農学校と改称しています。上水内農学校の備品であることを表す「上水内農学校」焼き印があることから、大正一二年以降の導入とも考えることができますが、源五兵衛犂は関東においては畜力犂が普及する初期のころに畑作に使用されていたとされているものなので、以前から所有していたものを上水内農学校の時代に備品として登録されたことも考えられます。

この犂は、従来より九州の国東半島や大分県南部沿岸で使用されヒトリズキとかマエビキとよばれていました。畿内では一挺掛けとか源五兵衛犂とよばれたようです。文政五（一八二二）年に大蔵永常が著した『農具便利論』には、「大坂近辺または京辺で、もっぱら用いられる。菜蔬・麦などを作るのに、犂・馬鍬を曳かせる牛馬もないところでは便利に使用することができる。牛馬があって犂を使用するところでも、麦の土寄せにはこの源五兵衛犂が好ましい」と書かれています。

この犂は両手で把手を持ち、後退しながら人力で引くものです。作条に使われたり、麦の根際に土を寄せるのに用いられました。「両開手引鍬」と名称が書かれているのも、使用法を表していてうなづけます。寄贈された人力犂は、犂床や犂先の摩耗がほとんどないことから、使用回数が少ないことが推し量れます。

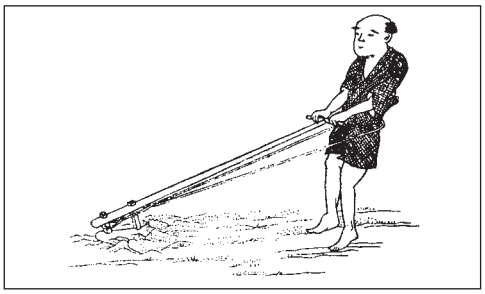
犂轅長二二〇cm　犂高八二cm　犂先巾一九cm　犂先は折損している。

【畜力　無床犂】

②③コガラ

②は犂身と犂床が一木で作り出されています。③の犂は

①源五兵衛犂



源五兵衛犂　『農具便利論』より

犂身の先に二・五cm幅のホゾを二つ作り、犂床に差し込んでいます。②③ともに犂床先端を舌状に拵え鋳鉄製犂先をはめ込んでいるだけで、犂へらはありません。

大分県大野町民俗資料館や広島県呉観光植物園で所蔵する、犂床が不明確で犂床と犂身が一体化している犂と形態が酷似しています。この形態の犂が多く使われていた九州の阿蘇山麓の畑作地帯（大分・宮崎・熊本県）ではコガラとよばれてきました。無床犂の分化したものとして形態区分されていて、犂へらがなく土れきを左右に反転することができるので両用犂と位置づけられています。

②コガラーイ

犂轅長一五七cm犂体高九三cm犂床（犂先を含む）四五cm犂先巾一二cm

③コガラーロ

犂轅長一五九cm犂体高一一二cm犂床（犂先を含む）四九cm犂先巾二〇cm

寄贈されたコガラは、いずれも犂先は先端の左側が摩耗し、犂床の安定する角度からすると左反転を主として使われていたことが伺われます。どちらもハヅナは犂轅の先端に溝を彫り、引木を縄・紐で縛る仕掛けが拵えてあります。

二つの犂は、大きさは異なりますが、木製部の木質と犂型は酷似しています。製作した人が同一であることが推し量れます。

②コガラーイ

③コガラーロ

③拡大図

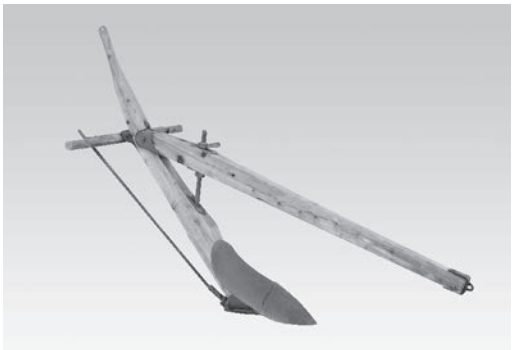
【畜力　双用一段耕犂】

④上田式双用一段耕犂

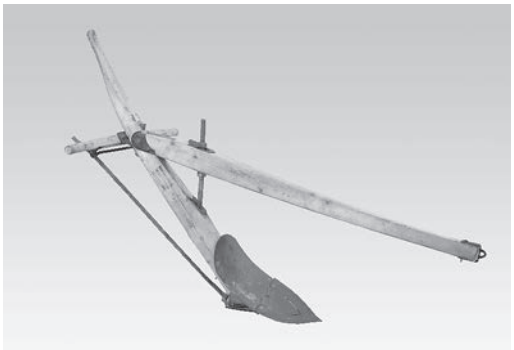
双用切替レバーが丸棒。犂身の右側面に「長野県上田市 上田犂製作所」、犂轅の右側面に「上田犂」の焼き印。

⑤上田式双用一段耕犂

双用切替レバーが平板。馬蹄型鋼製の犂先をもつ。犂身の右側面に「長野県上田市 上田犂製作所」「実用新案登録第一八八七二〇番 第二二八九一五番」、犂身の左側面に亀を具象する焼き印と「長野県上田市 上田犂製作所」、犂轅の右側面には「上田犂」「省力深耕」左側面には「上田犂」把手の前面には亀の焼き印。



④上田式双用一段耕犂

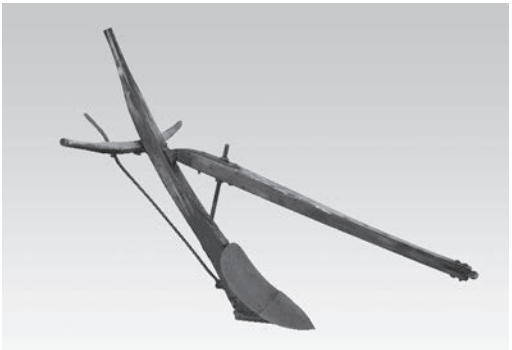


⑤上田式双用一段耕犂

高遠町の伊藤脩氏寄贈の木札。

◆上田犂製作所は大正二年に上田犂を創出したことにはじまります。創業者の中村六郎は上田市鍛冶町の鍛冶職人で、松山（株）の創業者である松山原造を鍛冶職として支え、堅牢な鋼製の犂先を装した単鑱双用犂（明治三四年第四九七五号特許取得）をともに作り上げた同志でありました。大正三年まで松山犂の犂金具を専門に製作していましたが、その後、上田犂製作

⑥ダイヤ犂



⑦礒野式両用犂　初風号

所を創業しました。昭和九年に一府八県連合会馬匹共進会で上田犂が三等賞を受賞、昭和一一年には大日本農会で懸賞募集された畑地用犂の選考会において鉄線材のフォークへらを装した上田式双用畑用犂が一・二等賞なしの三等賞に入賞し、その後の畑用犂に採用された自由べら、弾性べらの原型となったとされています。こうして上田犂は、普及の足がかりを作っていきました。

⑥ダイヤ犂

犂轅の右側面と犂身の右側面に「ダイヤ犂　二一型」及びDIAの商標の焼き印。犂把前部のアルミ製ラベルに「二一　四〇五三」の刻印があり、商品番号と思われます。昭和五二年一〇月　堺沢寿雄氏寄贈の木札。

ダイヤという商標を持つ犂メーカーは、昭和二九年～三三年の農機具年鑑にも存在していません。東京都中野区の日本スプレー製作所は噴霧器のダイヤ式を、香川県三豊農機製作所は脱穀機のダイヤ号を、愛知県の㈱共栄社は脱穀機のダイヤモンド式を製造していましたが、犂においてはダイヤ号を商標とするメーカーを把握することができませんでした。

⑦礒野式両用犂　初風号

犂轅の左側面に「専売特許礒野式両用犂　初風号」の墨書、犂身の右側面に「福岡県博多　礒野七平製作所」「初風号」の焼き印。把手は両端がそり上がる。犂釣は横に三穴。昭和五二年八月　駒ヶ根市小原重雄氏寄贈の木札。

◆礒野式両用犂を製造した礒野製作所は、永禄二（一五五九）年に創業しています。江戸時代初期の島原の乱では大砲の玉の鋳造に従事し、その功を労い藩から保護を受けました。明治時代は礒野七平鋳造所と称し抱持立犂（かかえもったてすき）の犂先・犂へらを製造しました。両用犂は大正三年から販売していて、「初風号」は一九二〇年代の後半に製造しています。礒野では、双用犂といわずに両用犂と称しました。

【畜力　双用二段耕犂】

⑧礒野式双用二段耕犂　二号

犂轅の左側面に「（専売特許）礒野式双用二段耕犂（二号）」、犂身の右側面に「福岡県博多　礒野七平製作所」「初風号」の焼き印。犂把の前部に「シ」の刻印。金具は縹色（はなだいろ）に塗布されていたらしい。把手はそり上がらず、水平。犂釣は縦に五穴。

◆礒野式犂の瑞風（みずかぜ）号二段耕犂と豊風号二段耕犂は単用犂ですが、「初風号」二段耕犂は双用犂です。二段耕犂は昭和初年から製造され、戦争末期に製造を一時中断しましたが戦後再開し、好評を博しました。礒野の前犂の取付方法は、犂身型。

⑨礒野式双用二段耕犂　六号

犂轅の左側面に「△」「（専売特許）礒野式双用二段耕犂（六号）」、犂身の右側面に「福岡県博多　礒野七平製作所」「初風号」の焼き印。犂把前部に「△」の刻印と「一八〇」の刻印。金具は深緑色に塗布されている。

⑩日の本（もと）式双用二段耕犂

犂轅の左側面に「日の本号二段耕犂」、犂身に「上熊本駅前　東洋社」の焼き印。犂釣は縦に五穴。昭和五二年一〇月　東洋号の木札。

◆日の本（もと）式二段耕犂を製造した東洋社は、熊本県上益城郡辰野村に文久三（一八六三）年に甲佐犂とよばれた長床犂を製作したのにはじまります。昭和三年、東洋各国への犂の普及をめざして社名を東洋社と改め、犂も「日の本号」と命名。日の本号両用二段耕犂は、昭和二五年から生産され、昭和二七年～二九年に多数販売されました。安定がよく、土れきの天地返しが良好で、重量も軽く使用が容易であったため全国二段耕犂需要の七割を占めました。

上伊那における畜力犂の導入

明治二六～二八（一八九三～一八九五）年の「大日本農会報」に下伊那郡郡役所員中

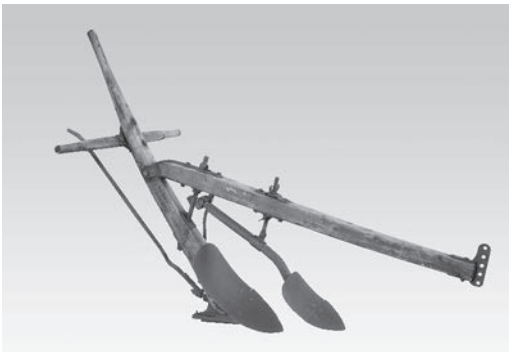
村義太郎が報告した記事によると、明治二六年四月に中村義太郎が馬耕の実態調査と伝習教師招聘のために岐阜・愛知・静岡・神奈川・群馬・東京の各地を巡回して翌月帰庁。その調査の結果、静岡県で使用する肥後犂が適当であるとして、静岡県で雇傭されていた熊本県玉名郡の北原大八を五月から下伊那郡馬耕教師として招聘しました。試作田で伝習したところ参観人は賛称して犂を購入し、明治二八年には馬耕を実施する者が三千名に達したと報告されています。

長野県における畜力利用は、明治初年まで運搬と代掻きのみで、牛馬耕は全く行われていませんでした。明治一〇年代末に農業先進地から農法を学ぶことを政府が奨励するようになり、先進的な農業をしていた北九州の博多に設立された農業教師養成組織「勧農社」から各県は農業技術者を招聘しました。筑前の慣行農法と犂利用を組み合わせたこの農法は、明治農法の中核的な農法として全国に広まりました。勧農社から派遣された農業教師が教えていた馬耕犂が、無床型の抱持立犂（かかえもつたてすき）でした。

長野県勧業課は、明治二四年に勧農社社員の原田勝三郎を米作改良試験教手として雇い、翌年から上高井・更級など五郡の篤志農家をつのって「伝習人」とし、四〇ヶ所余りの試験田で在来農法との比較をしています。

明治二七年一一月一六日付の信濃毎日新聞には、上伊那郡へ原田勝三郎が出張した記事があります。翌二八年春から米作改良法を上伊那郡で実施するため種子選択に来たことを報じるものです。一方、当館所蔵「明治三一年松山原造日記」の住所録には、長野県下の勧農社社員の赴任地と氏名が記されていますが、上伊那郡・下伊那郡・木曽郡の記載はありません。

⑧礒野式双用二段耕犂　二号



⑨礒野式双用二段耕犂　六号

これらのことから、伊那地方には肥後犂を教える熊本県の馬耕教師が入り農法が伝習されていて、抱持立犂を使う勧農社は入り込めなかったことがうかがえます。また、その後に、長野県勧業課の指導によるものなのか明治二八年春からは米作改良試験教手による福岡農法が導入されていったことがわかります。

折しも明治二八年五月、上伊那郡伊那村（現　伊那部）に上伊那郡立上伊那簡易農学校が開校します。これが寄贈資料を所有していた長野県上伊那農業高等学校の前身です。

寄贈された畜力犂をみると、自然木で拵えてある②③は、阿蘇山麓の畑作地帯で使用されたコガラと形態が酷似していることから、下伊那郡で導入した肥後犂というのは、このようなコガラではなかったかと憶測できます。

それから時を経て、松山式双用犂の発明から九年目となる明治四二年に、上伊那郡農会を通じて松山犂が上伊那郡下に斡旋され（「上伊那　中川村歴史民俗資料館所蔵の旧村役場文書」）、普及していきました。

畜力犂生産のピークを迎えていた、昭和二九年の奨励農機具制度による都道府県奨励犂をみると、長野県での奨励犂は、松山・筑摩・高北となっています。松山犂は青森・岩手・山形・福島・茨城・神奈川・新潟・富山・石川・長野・岐阜・静岡・兵庫・岡山・広島で、上田犂は青森・福島県で推奨されています。

長野県上伊那農業高校が所蔵していた畜力犂のうち、上田式双用犂の一点と礒野式双用二段耕犂二点が昭和五二～五三年収集を示す木札のないことから、長野県上伊那農業高校では双用犂では上田式双用犂が、双用二段耕犂では福岡県の礒野式双用二段耕犂が実習教材として使われていたことを推し量ることができます。上伊那における畜力犂の普及のようすを、寄贈資料からうかがい知ることができました。

（学芸員　田中壽子）

二段耕犂

二段耕犂は、従来の犂に前犂（副犂）を取付たもので、土を一段で耕起していたのが二段に耕起するようにしたものです。二段耕犂は、前犂で表土を耕し本犂で心土を耕起するので完全に天地返し耕と深耕ができました。また、水田においては秋落ちをなくし全層に肥料が施用されることから、アンモニア窒素の損失をなくし、砕土効果があり労力の節約とともに除草効果も得られました。

二段耕犂には、前犂の犂体への取付部位の違いから「練り木型」（松山式・深見式）、「犂身型」（礒野式）、「折衷型」（日の本式）、「特殊型」（高北式）の四種に型式区分した呼び名がありました。松山（株）は、練り木型の二段耕犂を開発し昭和二四年から製造販売しました。

（財）松山記念館に収蔵する松山（株）の営業史料の中に「一九五四年春　犂耕実演講習会説明要領」というマニュアルが綴じられていました。この年から松山式単用・双用二段耕犂が発売となり、販売促進にあたっての営業マニュアルと思われます。それには、二段耕犂の使用効果とともに調節の要領なども書かれていますが、ここでは松山式二段耕犂の特長と操作について拾い出してみます。

〔特長〕

前犂の取り付けを練り木型にしてあるので、取り外し・取り付けが極めて簡単にできる。新たに二段耕犂として購入しなくても松山式犂であれば、明治時代の犂でも前犂のみ購入すれば二段耕犂として使用できる。犂先をレバーで回転させたときの偏心は、前犂については回転軸の切溝と回転金の切溝を合わせれば左右同一になるように設計している。

松山式犂は軽くて丈夫ということを基本態度に設計していて、金属部分については、一般に使っている普通鋳物をほとんど使用せず、主として鋼材を有効適切に使用している。

〔使い方〕

前犂はあまり多くかけず、全体の深さの三分の一位にして、耕巾は一段耕犂より狭くかけて犂の使用角度を小さく垂直に近くして使用する。

使用中に犂を左右に振る作用はできるだけしない。前犂が土中に入っている物を無理矢理に動かすようなもので、前犂を壊すこととなる。回転する時には必ずレバーを握ってからハンドルを回転させるようにする。前犂の上下の調節の時には必ずハンドルを中心に持ってきてから調節する。

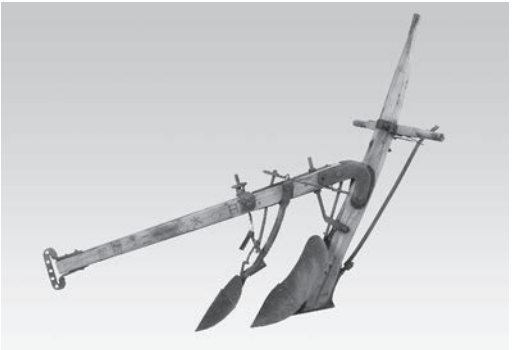
【二段耕犂の歴史】

二段耕犂は、明治四五年ごろ香川県で考案され、大正一四（一九二五）年に福岡県嘉穂郡穂波村の犂制作者、花田真次が初めて「二段犂」と名付けて特許を得たことから使用が始まりました。昭和三（一九二八）年には福井県の定池亀次郎（定池農機製作所創業者）も単用二段耕犂の製作をはじめています。

一方、双用二段耕犂の製作に最初にとりかかったのは、福岡県上土居町の深見平次郎で昭和六年に特許を取得し、二段耕犂が普及する基礎をつくりました。この年に福岡県上土居町の礒野七平も瑞風二段耕犂を製作しました。しかし、戦前はあまり普及しませんでした。

熊本県の東洋社は昭和一六年から単用二段耕犂の製造をはじめ、昭和二三年には全国農業機械博覧会で二段耕犂として最初の金牌を受賞しました。次第に二段耕犂が、従来の一段耕犂に比べ牽引抵抗や自重が大きいものの、砕土性能や反転性能などが優れていることが知れ渡り、全国に普及して水田の表裏両用に利用が増加していきました。こうして昭和二三年頃から二段耕犂のブームが現れ、各社は二段耕犂の開発を競いました。

松山犂製作所の広告



⑩日の本式双用二段耕犂

た。松山（株）は前述のとおり、昭和二四年から二段耕犂の製造販売をはじめています。

昭和二八年「機械化促進法」によってハンドトラクタの導入が進むまで、東洋社は二段耕犂需要の七割を占め、普及を牽引しました。

全盛期には高北式や日の本式では鉄製の犂を製造販売するようになり、犂体を鉄製にするために必要な種々の考案がなされ、次々と特許・実用新案の出願がされました。いっぽう、埼玉県の井田恒次は数個の前犂を犂轅に取り付けた多段犂を考案するなど次第に二段耕犂は複雑な構造が競われていきました。

【二段耕犂の国営検査】

昭和二四年度から昭和三〇年度にかけて行われた農林省による「農機具国営依頼検査合格機」を認定する検査のうち、犂については二段耕犂の検査が昭和二五年と二六年におこなわれています。

検査は農林省関東東山農業試験場で行われ、検査の申込工場数三四社、検査台数は四一台でした。この検査に合格した犂はわずか一三社・二〇台、合格率は四九％でした。昭和二六年実施の動力脱穀機の国営検査が七四％、昭和二七年実施の籾すり機の国営検査が八七％だったことと比較すると実用に適する二段耕犂の開発は、難しい課題だったと思われます。

【二段耕犂の合格機】

松山株式会社（当時は松山製作所）はこの時、単用二段耕犂の一一号・二五号が合格証票四五一号を、双用二段耕犂の甲小型・大型が合格証票四六二号を受けています。松山式双用二段耕犂バケン型は、昭和二四年から発売をはじめ、傾斜軸を採用した練り木型のため、前犂の着脱が自在で、一段耕犂としても使用できる互換性がありました。前犂の深浅調節を行っても地面に対しての作用角は変化することなく、つねに適切な作用角を保持することができました。

昭和二五年及び二六年の検査で農機具国営依頼検査合格機に認定された二段耕犂をみると、高北式（三重県の高北農機製作所）では単用の光栄号・土の母号と双用の土の母号、礒野式（福岡県の礒野七平製作所）では単用の端風二段耕と双用の初風二段耕二号、日の本号（熊本県の東洋社）では単用の四号・六号と双用の二段耕犂などもあります。

【二段耕犂の生産ピーク】

犂の年次別生産台数は、昭和二五年一〇万台、二六年一四万台、二七年一八万台、二八年二一万台、二九年二〇万台、昭和三〇年一七万台、と昭和二八年の二一万台が最高でその後は漸減していきました。牛馬耕が昭和三〇年ころから動力耕耘機に押されるようになり、昭和四〇年ころには次第に姿を消していきました。

二段耕犂の作業風景

（学芸員　田中壽子）

『日本農機商大鑑』昭和九年　農機新報社
『躍進　長野県誌』昭和一四年　長野県誌編纂所
『日本農業発達史　第一巻』昭和二八年　中央公論社
『昭和三〇年版　農機具年鑑』昭和二九年　新農林社
『昭和三二年版　農機具年鑑』昭和三二年　新農林社
「二段耕犂」新関三郎　昭和三一年『雑誌　農業日本』
「二段耕犂のはなし」手塚右門　昭和三一年『雑誌　農業電化』
『農機工業の変遷』昭和四〇年　新農林社
『長野県政史　第一巻』昭和四六年　長野県
『日本の鎌・鍬・犂』昭和五四年　大日本農会
『長野県史　近代史料偏　第五巻（二）』平成三年　長野県
『図説　畜力農機具発達史』平成七年　下田博之著
「館報　まつやま一五号」平成一八年　松山記念館

第十七回文化講演会の開催

平成二十年十月十八日松山記念館主催、上田市・上田市教育委員会後援で、松山株式会社三階ホールにて、第十七回文化講演会が開催されました。

講師は、九州大学名誉教授・農学博士 坂井 純氏をお願いし、「日本のスキ（犂）とロータリ耕耘（うん）作業機の発達と、国家の近代化」をテーマとして講演された。（聴講者一四七人）

講演会に先立ち主催者を代表して理事長が挨拶に立ち、今講演会のご後援を頂いた上田市、上田市教育委員会を代表してご出席頂いた三好健三丸子地域自治センター長様と、ご多忙のなか本日の講演をお引き受け頂いた坂井純様にお礼を述べ、「先生は近代的耕うん作業機を専門に学べられ、これを深めるには耕うん作業の原点である犂の原理の習得が不可欠との思いで犂の研究の第一人者であった森 周六先生から学ばれた『犂の原理を語らせたら右に出るものがおらない』と言われる方ですので演題に添って奥深い話がたくさん出てくると思いますから、ご静聴おねがいします」と開会の挨拶をしました。

続いて後援者を代表して三好健三丸子地域自治センター長より松山株式会社の国蝶オオムラサキの保護にはじまる環境・自然保護の取組みに敬意を、そして地域の子育て支援、少子化対策への積極的取組みにも感謝を表された上、郷土の貴重な資料館として松山記念館がより発展され、この講演会が今後も末長く続く事を祈念しますと挨拶を頂いた後、講演に入った。

・農業工学を森周六先生に学ぶ
・欧米人は、アジアの農業を教えられない
・農業人口からみえる機械化の伸展
・小作制度の解体と農業の機械化
・歩行用トラクタから乗用トラクタの時代へ
・水田稲作農業と畑作農業の食文化の違い
・農業就業人口の割合にみる農業の発展
・ドル外貨備蓄保有額にみる日本経済
・営業のセンスを学ぶことも必要

等のテーマを自らの体験を交えた実情を熱弁でお話しいただき、最後に

・「仕事の一〇〇％達成」は普通。八〇％達成で満足するのは学生気分。実社会では、一〇〇％以上どれだけ出来たかが、「仕事の成果の極意」・各国工業規格のＪＩＳ（日本）、ＡＳＡＥ（米）、ＤＩＮ（独）などは、製品の「品質性能合格最低基準である。工業規格よりもどれだけ良い製品を開発生産できるかが「開発設計とテスト改良と製造関係技術の第一歩」。これが日本の技術者魂なのです

・「人間の集中力は二～三時間が限界」は常識。「最重要な一つの業務を全力遂行続行する」のは、却って能率が上がらない。ですから「重要な優先業務テーマを二つ選んで二～三時間ごとにテーマを切り替えて仕事をするのが、最高の能力で仕事を続行する極意」。と日本企業技術者魂についての坂井語録を述べられ講演を締くくった。

理事会・評議員会開催

★平成二十年十二月十日（木）協同サービス（株）二階ホールに於いて、第二十回理事会、第二十一回評議員会が開催され、基本財産の運用と、平成二十一年度事業計画書（案）・同予算書（案）及び新公益法人制度に対する対応について審議され、出席者全員の承認を得て終了された。

★平成二十一年二月十三日（金）協同サービス（株）二階ホールに於いて、第二十一回理事会、第二十二回評議員会が開催され、平成二十年度事業報告書及び収支計算書と収支計算書の注記並びに財務諸表（貸借対照表、財産目録、正味財産増減計算書、財務諸表の注記）の承認の件について審議され、出席者全員の承認を得た。引続き役員の任期満了に伴う改選を行った。理事七人、監事二人及び評議員九人全員が再選重任と決定された。

平成二十一年度役員

◎理事長（館長） 松山 信久
理 事 西尾 和実
同 滝沢太三雄
同 村岡 進
同 中山 忠義
同 塩川 勝也
同 勝野 和人
◎監 事 綿谷 光男
同 羽田 俊祐
◎評議員 三吉 治敬
同 高野 知久
同 宮下 孝夫
同 関 賢治
同 福井 努
同 渡辺 毅
同 松山志津江
同 吉原 孝則
同 清水 英一

新入社員の研修見学

松山株式会社の平成二十一年度新入社員は、四月一日（水）の入社式終了後、当館を訪れた。

平成二十年度当館見学者

総数 一、六三五人
内訳
県外（含外国） 四九、八％
東信 三四、一％
北信 四、五％
中信 三、四％
南信 八、二％

第十八回文化講演会決定

日時・平成二一年九月二五日(金)
午後三時十分～五時
場所・松山（株）三階ホール
講師・川辺農研産業株式会社
取締役会長 川辺 久男氏